

ご来場の皆様、

いまお聞きいただいているのは、私の親しい友人・長瀬修の声ですが、私はマークの父、ポール・ブックマンです。本日は、お忙しい中、息子マークの人生、活動、そして息子の願いを描いたドキュメンタリーをご覧いただき、誠にありがとうございます。この映画を通じて、マークという人物と、息子が生涯をかけて目指したものについて、少しでも知っていただけたなら幸いです。

冒頭に立命館大学生存学研究所において本日の企画の実現に多大なるご支援とご協力をいただいている美馬達哉所長、松原洋子先生、伊東香純先生に、心より感謝申し上げます。皆さんの中にはご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、マークは 2022 年 12 月に亡くなった当時、この生存学研究所で客員研究員として活動していました。また、マークは 2023 年春に京都へ移り、この素晴らしい研究所で研究を継続する予定でした。息子の人生と仕事についての映画が本日ここ立命館大学で上映されることを、息子もきっと喜んでいることと思います。

さて、マークがこの世を去って、もう 2 年半が経とうとしています。まるで昨日のこのように思えるのですが、日本での撮影を終えたわずか 6 週間後、突然息子が亡くなるとは思っていませんでした。息子の死と向き合うなかで、私は改めて、マークが国際的な障害者コミュニティ、特に日本において、どれほど大きな存在だったのかを実感しました。息子を知る人、息子の活動を知ってくださっていた方々からの温かいメールやメッセージ、電話に、私は何度も救われました。

マークが日本に惹かれたのは、アニメやマンガとの出会いがきっかけでした。高校時代に日本で暮らした経験は、息子の人生を大きく方向づけました。帰国後、「将来は日本で暮らしたい」と語った息子の瞳は輝いていました。その後、何度も来日するなかで息子の身体は不自由になっていきましたが、日本社会がバリアフリーへと急速に進化しつつあることに感銘を受けていました。同時に、まだ多くの課題が残されていることにも強く意識を向けていました。ドキュメンタリーでも描かれていた通り、息子は短い人生のなかで、できる限り多くのことを実現しようと、全力で活動を続けていました。

マーク自身も、そして私たちも予想しなかったのは、米国の大統領選を経て、障害をめぐる状況がこれほどまでに変わってしまうことでした。私は歯科医で、障害学の専門家ではありませんが、1990 年に制定された「アメリカ障害者法 (ADA)」以降、米国こそがインクルージョンの先頭を走っていると信じていました。おそらく、今日ご来場の多くの皆さんも、そう感じていたのではないのでしょうか。しかし、残念ながら現在のアメリカは、インクルーシブな社会を目指すどころか、むしろ後退しています。DEI (多様性・公平性・包摂性) に関わる政策を進めてきた教育機関は処罰の対象となり、文献やウェブサイト、政府のプログラムからもその言葉が消されつつあります。まさに、かつての“模範国”が、自らその立場を放棄しているのです。

だからこそ、マークが残した「障害について開かれた対話を」というメッセージは、いまなお輝きを放っています。もはや、米国に運動の旗手を期待することはできません。しかし、マークなら、こう言ったはずです。「だからこそ、他の国々がリーダーになれる」と。とりわけ息子は、日本こそがその先頭に立てると信じていました。

マークは自らを、米国人というよりも「日本人の一員」と感じていたようです。その理由は多くありますが、なかでも、日本における変化のスピードに希望を見出していたからです。

駅やトイレ、タクシーのバリアフリー化が進む一方で、アメリカでは、今の政権に入る前からすでに停滞が見られました。だからこそマークは、日本での取り組みに強く惹かれ、自分もそこに加わりたいと願っていたのです。

今日、皆さんにお願いしたいのは、どうかその歩みを止めないでいただきたい、ということです。日本の障害者権利運動が、さらに発展し、他国にもその影響が波及していくことを、私は心から願っています。すでに多くの成果がありましたが、まだまだ課題は山積しています。障害のある人もない人も、すべての人に平等な権利と機会が与えられる社会を目指し、どうかこれからも研究、執筆、発表、活動を続けてください。世界はいま、皆さんの力を必要としています。

最後に、長瀬さんはこれを読むのが少し気恥ずかしいかもしれませんが、長瀬さんの尽力についてもお話しさせてください。本来、この上映会と、他 3 回の関連イベントには、アメリカ政府からの助成金が出るはずでした。しかし、「DEI を推進する内容である」という理由で、現政権により突然取り消されました。それにもかかわらず、長瀬さんは自ら責任を持ち、これらのイベントを実現させ、アメリカ政府が我々の声を封じ込めようとするのを許しませんでした。このイベントが実現したのは、ひとえに長瀬さんのおかげです。ご本人は控えめにされると思いますが、私は心から感謝しています。

本日はご参加、本当にありがとうございました。美馬所長、松原先生、伊東先生をはじめとする生存学研究所の皆様、そしてご来場の皆さんと直接お目にかかれないのは残念ですが、どうかこれからも、平等とアクセシビリティの実現に向けて歩みを進めてください。少しずつではあっても、確実に前進は続いています。そして、その歩みを止めてはなりません。